

No.35

損保ジャパン東郷青児美術館

NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART



ベルト・モリゾ《モルクールのリラの本》1874年 油彩・キャンヴァス 個人蔵

ベルト・モリゾ展

Berthe Morisot 展
A Retrospective

2007年 9月15日(土) » 11月25日(日)

解き放たれたイメージ サーカス展

2007年7月14日[土]～9月2日[日]



フェルナン・レジェ《アクロバット》1953年
財団法人 池田 20 世紀美術館 ©ADAGP, Paris&SPDA,Tokyo, 2007

◆ 18 世紀末にイギリスで生まれた“近代サーカス”の普及と並行して、ドミエ、ドガ、ロー

トレック、スーラらの印象主義の作家たちが、最初に作品のモチーフとしてサーカスに注目しました。その後、本展に出品されているピカソ、ルオー、ビュフェらが、サーカス芸人に自分の姿を重ね、人間の悲哀、苦悩、宿命などを表現しようとした。また、シャガール、レジェ、マティスらは、日常の時空間から解放されるサーカスの祝祭性を表現しようとしたのです。一方日本では、安井曾太郎、東郷青児、海老原喜之助らがフランスに留学し、現地の作家たちから影響を受けながらサーカスを描写しています。日

本国内でも、長谷川利行、川西英、恩地孝四郎らが、来日したサーカスを見て、その衝撃と



恩地孝四郎《サーカス》1933 年 和歌山県立近代美術館

喜びをもとに作品を展開しています。本展では、9 人の海外作家と 18 人の国内作家による、サーカス・イメージの油彩、素描、版画、写真、立体作品 92 点をご紹介します。表現方法は様々ですが、これらの作品をとおして数多くの作家たちを虜にしたサーカスの魅力を探る機会となることでしょう。

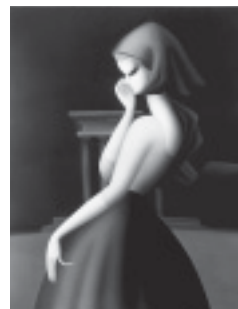
東郷青児 昭和のアトリエ展

2007年12月1日[土]～12月26日[水]

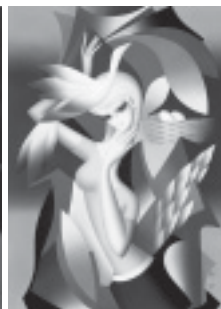
◆ 町から戦禍のあとが消え、新しいビルが立ち並ぶようになったころ、青児の描く長い首と指先をもつ女性たちは百貨店の壁や洋菓子店の包装紙などを華やかに彩りました。さりげなく少女の顔が添えられたカップや裁縫セットなどのこまごました景品は、全国津々浦々の店で配られ、探せば今も家のどこかにあるかもしれません。大人気を博したこの女性の絵のスタイルは、青児が7年間のパリ滞在から31歳で帰

国した後、昭和5～6年頃(1930年代)に作り上げたもので、戦争中もほとんど変わることはありませんでした。

たおやかにまつ毛をふせ、あるいは透き通るような瞳でこちらを見つめる女性たちは、完璧なプロポーションでポーズをとったまま、作者については多くを語りません。「昭和のアトリエ」と題した本展では、青児が生涯手放さず晩年に当館へ寄贈した油彩画のコレクションを中心



《望郷》1959 年 油彩



《鳥と少女》1971 年 油彩

に、素描や写真などの資料を加え、数々の女性像を生み出した青児自身の目線から、制作の軌跡をご紹介します。

損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念

小杉小二郎展

2008年1月12日[土]～2月17日[日]

◆ 小杉小二郎氏は1944年、東京・滝野川(現在の北区田端)に生まれ(父は美術史家の小杉一雄、祖父は画家の小杉放菴[別号:未醒])、インダストリアルデザイナーの叔父・小杉二郎の影響を受けて日本大学芸術学部工業デザイン科で学びました。大学卒業後はインダストリアルデザインの道に進みますが画家に転向、1968年に画家・中川一政の知遇を得て中川のアトリエに通い始めました。1970年、中川と共に渡仏、一時帰国後、再度単身でフ

ランスに渡りパリのアカデミー・グランド・シュミエールで学び、1971年からフランスのサロン・ドートンヌに出品しています。1974年には最初の個展を日本で開催、以降フランスと日本を拠点に制作・発表を続けています。風景や花・玩具などを穏やかな形態と温かみのある色彩で描いた幻想的な油彩画の他、近年では岩彩を用いた作品や連作「聖書物語」に代表される装飾性の高い作品、ユーモラスなオブジェにも取り



小杉小二郎《月・追憶》2005 年 油彩・キャンヴァス 130 × 162cm

組んでいます。本展覧会では受賞作《月・追憶》を中心に約60点を展示、小杉小二郎氏の画業を展望いたします。

2007年7月14日〔土〕—9月2日〔日〕 解き放たれたイメージ サーカス展

日常の時空間に束縛された私たちを解放し、異空間へ誘うサーカスの世界に魅了された9人の海外作家と18人の国内作家による、サーカス・イメージの作品約90点を紹介します。

◆ 月曜休館（7月16日は開館） 午前10時～午後6時まで（金曜日は午後8時まで） 入館は閉館の30分前まで

◆ 入館料：一般1,000円（800円）／大高生600円（500円）、（ ）内は20名以上の団体料金／シルバー（65歳以上）800円／中学生以下無料

2007年9月15日〔土〕—11月25日〔日〕 ベルト・モリゾ展

印象派を代表する女性画家ベルト・モリゾ。女性が画家になるのが困難だった時代、画家として女性として生きたモリゾの生涯と画業を紹介します。

【お客様感謝デー無料観覧日10月1日（月）】

◆ 月曜休館（9月17・24日、10月1・8日は開館） 午前10時～午後6時まで（金曜日は午後8時まで） 入館は閉館の30分前まで

◆ 入館料：一般1,000円（800円）／大高生600円（500円）、（ ）内は20名以上の団体料金／シルバー（65歳以上）800円／中学生以下無料

2007年12月1日〔土〕—12月26日〔水〕 東郷青児 昭和のアトリエ展

大正10（1921）年に渡仏した青児は、昭和3年に帰国後、後に広く知られるモダンな女性像のスタイルを作り上げました。写真などの資料と館蔵品をあわせ、昭和の都市を彩った青児の制作風景を紹介します。

◆ 月曜休館（12月24日は開館） 午前10時～午後6時まで 入館は閉館の30分前まで

◆ 入館料：一般500円（400円）／大高生300円（200円）、（ ）内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

2008年1月12日〔土〕—2月17日〔日〕 損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念 小杉小二郎展

損保ジャパン東郷青児美術館大賞の受賞を記念し、受賞作《月・追憶》を中心に油彩をはじめコラージュ、オブジェなど、初期の作品から最新作まで、約60点を展示します。

◆ 月曜休館（1月14日、2月11日は開館） 午前10時～午後6時まで 入館は閉館の30分前まで

◆ 入館料：一般500円（400円）／大高生300円（200円）、（ ）内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

2008年3月1日〔土〕～3月30日〔日〕 第27回損保ジャパン美術財団選抜奨励展

36美術団体の「損保ジャパン美術財団奨励賞」受賞作（平面・立体）と、全国の30名の推薦委員によって推薦された平面作品を展示し、会場審査により優秀作品を選出、表彰します。

◆ 月曜休館 午前10時～午後6時まで 入館は閉館の30分前まで

◆ 入館料：一般500円（400円）／大高生300円（200円）、（ ）内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

TOPICS

選ばれた新進作家たち 第26回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 入賞作品報告



中谷晃《卓上の楽園》

損保ジャパン美術財団では第26回選抜奨励展（3月1日～3月30日）に先立ち、2月21日に全出品作（平面63作品）を対象に審査を行い、授賞を決定しました。審査員は津英敏、小杉小二郎、宝木範義、田中通孝、真室佳武の各氏に財団関係者2名を加えた計7名。入賞作品は下記のとおりでした。

損保ジャパン美術賞

中谷晃《卓上の楽園》油彩・キャンヴァス

秀作賞

木村富秋《鳥唄（唄）》油彩・キャンヴァス

鈴木雅明《Untitled -Light 2006》油彩・キャンヴァス

波田浩司《羽の舞う日》油彩・キャンヴァス

甘美なる聖母の画家 ペルジーノ展 ラファエロが師と仰いだ神のごとき人 2007年4月21日から7月1日まで

一昨年のプラト展に続き、国内ではまだ珍しい作家や作品群にスポットをあてるイタリア・ルネサンスシリーズの第2弾です。本展では、ラファエロの師であり、ダ・ヴィンチの兄弟弟子でもあるウンブリア出身の画家ペルジーノを日本で初めて取り上げ、作品30点を時系列に展示。同時に、先輩や弟子達の作品12点もあわせ、その後のヨーロッパ絵画に影響をあたえたウンブリア派をご紹介します。



ペルジーノ《聖めの聖母（部分）
1496-98年頃
ウンブリア国立絵画館

た。出品作の大半を収蔵するウンブリア国立絵画館では、1990年代から始まった調査と修復が2004年のペルジーノ展にまとめられ、20万人以上を動員したといひます。本展にも、当時の信仰と生活に結びつたルネサンス美術の奥の深さを感じたという感想が寄せられました。

損保ジャパン東郷青児美術館大賞授賞式開催 受賞作は元永定正氏の《いろいろいきてる！》



受賞作
《いろいろいきてる！》
2006年
全17点中2点
アクリル、厚紙
各21×57cm

6月19日（火）、損保ジャパン本社ビルにおいて、2006年度に損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞した元永定正氏の授賞式が開催され、選考委員

をはじめ多くの方々が出席されました。元永定正氏は1922（大正11）年三重県上田市生まれ。漫画家を志しましたが洋画に転向し同郷の画家・濱邊萬吉に師事しました。その後兵庫県に移り、1955（昭和30）年に具体美術協会の会員となり吉原治良に師事、具体グループを代表する作家となりました。近年は日本画のたらし込みを思わせる絵の具を流しこんだ技法をはじめ、多彩な技法・表現方法を用いた作品に取り組んでいます。受賞記念展「元永定正展（仮称）」は2009年1月に当美術館で開催される予定です。





ベルト・モリゾ展

Berthe Morisot A Retrospective

2007年 9月15日(土) » 11月25日(日)

ギャラリートーク

【一般】9月28日(金)、10月5日(金) いずれも17:30～

【小中学生と父母向け】9月22日(土)、9月29日(土) いずれも13:30～



1874年4月、パリのオペラ座にほど近いカピュシヌ大通りにある写真家ナダールのスタジオで、マネ、ルノワール、ドガら若手の画家を中心とした「画家、彫刻家、版画家など芸術家の共同出資会社による第1回展」が開催されました。後に「第1回印象派展」と呼ばれるこの展覧会に、ただ一人女性画家として参加していたのがベルト・モリゾ(1841～1895年)です。

モリゾは1841年に、シェール県の知事をしていた父の赴任先のブルジョで生まれました。裕福なブルジョワ家庭に育ち、芸術に深い理解を示していた両親のもとでモリゾは姉エドマと共に十分な絵画教育を受けました。はじめはアカデミー系の画家のアトリエで学びましたが飽き足らず、戸外制作への関心をきっかけにバルビゾン派の画家カミュー・

コローに師事しました。姉と共にサロン(官展)にも入選し評価を得ていましたが、その画業に決定的な影響を与えたのは後に印象派の父と呼ばれるエドゥアール・マネでした。マネを通じてモリゾは新しい主題や技法に触れ、後に印象派と呼ばれる画家たちとの交流を深めていきました。

経済的にも芸術的にも恵まれた環境に育ったモリゾですが、プロとして画家の道を選択するには並ならぬ決意が必要でした。19世紀後半という女性に良き妻・良き母となることが求められていた時代、モリゾ家のようなブルジョワ家庭の子女がお稽古事として絵を習うことはあっても、職業として画家になることは極めて異例のことでした。加えてサロンへの出品を取りやめて前衛的な新進グループ「印象派展」へ参加するということも、画家として勇気の要る決断でした。実際、サロンにこだわっていたマネはモリゾに「印象派

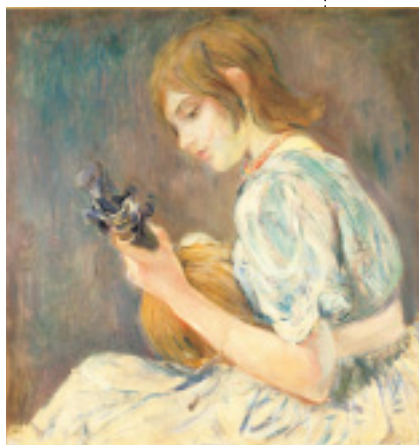
展」には参加しないように、との助言を与えていました。

「第1回印象派展」に参加した1874年、モリゾはマネの弟ウジェーヌと結婚します。モリゾはその後も印象派展に出品し続けますが、結婚後も制作を続けるには画家になると等しい覚悟が必要でした(姉のエドマは才能に恵まれていたにもかかわらず、結婚と同時に画業をあきらめました)。しかしモリゾは全8回行われた印象派展のうち、出産後の第4回展を除く7回に出品、グループの中心人物としてその運営に重要な役割を果たすだけでなく、技法的にも繊細でありながら大胆な筆遣いは他の男性の画家を凌駕し、時には影響を与えることすらあったのです。

本展覧会では個人蔵の作品を中心に、ベルト・モリゾの作品64点と姉エドマをはじめ同時代の画家が描いたモリゾの肖像画をあわせて展示、モリゾの生涯と作品を紹介します。



2



3



4

- 1 — ベルト・モリゾ《砂遊び》1882年 油彩・キャンヴァス 個人蔵
- 2 — ベルト・モリゾ《人形を抱く少女》1884年 油彩・キャンヴァス 個人蔵
- 3 — ベルト・モリゾ《マンドリン》1889年 油彩・キャンヴァス 個人蔵
- 4 — ベルト・モリゾ《ヴァイオリンの稽古》1893年 油彩・キャンヴァス 個人蔵

NEWS

お問い合わせ先 03(5777)8600
ハローダイヤル

財団法人 損保ジャパン美術財団 損保ジャパン東郷青児美術館
160-8338 東京都新宿区西新宿 1-26-1 損保ジャパン本社ビル 42 階
電話 03(3349)3081【代表】/ファックス 03(3349)3079
ホームページ= <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>
交通= JR 新宿駅西口、丸ノ内線新宿駅・西新宿駅、
大江戸線新宿西口駅より徒歩5分

損保ジャパン東郷青児美術館ニュース No.35
発行日(年1回発行)= 2007年8月1日
発行=財団法人損保ジャパン美術財団
損保ジャパン東郷青児美術館
デザイン・製作=求龍堂
印刷=凸版印刷株式会社

R100